

— 細氷 50号記念特集記事 —

昭和32年6月1日、気象学会北海道支部が発足しました。7月11日に札幌管区気象台において第1回理事会が開催され、理事の互選により、初代（第1期）支部長に北海道大学の中谷宇吉郎教授が選出されました。

以後、現在に至るまで、歴代支部長は23名に及びます。

支部機関誌「細氷」50号を迎えるにあたり、記念特集記事として支部長を務められた方々に寄稿文をお願いしました。

任期	支部長名	所属	期間	
第1期	中谷宇吉郎	北海道大学	S32.7.11~	故人
第2期			S35.9.27~	
第3期	吉田 順五	北海道大学	S37.9.3~	故人
第4期	神原 健	札幌管区気象台	S39.7.30~	故人
第5期			S41.7.14~	
第6期	高橋浩一郎	札幌管区気象台	S43.6.29~	故人
第7期	毛利圭太郎	札幌管区気象台	S45.6.24~	
第8期(前期)			S47.5.29~	
第8期(後期)	須田 建	札幌管区気象台	S48.6~	故人
第9期	孫野 長治	北海道大学	S49.6.17~	故人
第10期			S51.6.7~	
第11期			S53.6.13~	
第12期	矢崎 敬三	札幌管区気象台	S55.6.25~	退会
第13期	寺内 栄一	札幌管区気象台	S57.6.22~	
第14期	駒林 誠	札幌管区気象台	S59.6.5~	
第15期	吉田 泰治	札幌管区気象台	S61.6.6~	退会
第16期(前期)	秋山 勉	札幌管区気象台	S63.6.3~	退会
第16期(後期)	黒沢真喜人	札幌管区気象台	H元.6.9~	退会
第17期(前期)	二宮 洸三	札幌管区気象台	H2.6.12~	
第17期(後期)	原田 朗	札幌管区気象台	H3.5.15~	
第18期	久保田 効	札幌管区気象台	H4.6.8~	
第19期	菊地 勝弘	北海道大学	H6.6.17~	
第20期			H8.5.29~	
第21期(前期)	古川 武彦	札幌管区気象台	H10.6.4~	
第21期(後期)	巽 保夫	札幌管区気象台	H11.5.27~	
第22期(前期)			H12.6.5~	
第22期(後期)	藤谷徳之助	札幌管区気象台	H13.5.21~	
第23期(前期)	大西 晴夫	札幌管区気象台	H14.6.4~	
第23期(前期)	櫻井 邦雄	札幌管区気象台	H15.6.3~	
第24期	松尾 敬世	札幌管区気象台	H16.6.9~	

— 歴代支部長寄稿（50号記念特集） —

北海道支部の思い出

（第7期、第8期前期）毛利 圭太郎

このたび、「細氷」の創刊50号を記念して、特集記事を組まれるということで、私の思い出を書かせていただきます。私が札幌管区気象台に勤務して、日本気象学会北海道支部の支部長を勤めさせて頂いてから、もう30年余りたちました。さすがに年月の流れを感じますと共に、記憶もうすれましたが、当時の気象台の皆様とご一緒に仕事をして、また当時の北大教授の孫野先生とも時々お会いして、気象学のことや、いろいろのお話をしたことが断片的に思い出されます。具体的な詳しいことは忘れたことが多いのですが、やはり「つゆ」のない北海道のあの夏のすばらしい気象状況とか、冬のあの猛烈な吹雪のことなどは忘れることができません。特に雪の予報はむずかしいなあと、しみじみ感じたことを今でも思い出します。また、猛吹雪は一度経験してみて、いかに物凄い状況かということも分かりました。学会のことで皆様とお話をしたあとなど、何か少し勉強しなくてはと思いつつ、折をみてはラジオゾンデの観測資料などを調べてみたことも思い出します。

私は予報官の時代が長かったものですから、北海道の特徴の一つとして“留萌低気圧”を覚えておりました。そして札幌にきて、予報官の方々とお話をし、いろいろお話がはずんだこともありました。一冬過ごして猛吹雪を経験してからは、雪の現象に一層関心をもつようになりました。予報だけでなく災害という面からも勉強すべきことが沢山あることを知りました。

雪の問題に関連して、大陸からの寒気の吹き出しの立体状況をどう調べたらよいか、というような気持ちから、垂直断面図を作ってみようかと思ったりしました。ある時、これは初夏の頃でしたが、ラジオゾンデの状態曲線に、大気中層ではっきりした逆転層をもった cold dome が目についたので、大陸からの寒気の吹き出しの様子を知ろうと思って垂直断面図を作ったことがありました。この結果は一度学会の研究会でもお話をし、集誌に投稿致しました。私としては、その後冬の猛吹雪の時の断面図でも作ってみようかと思ったりしましたが、そのままになってしまいました。また、ある時、降雪と視程との関係について調べたこともありました。

思えば、最近の気象学は随分進んだものだと、テレビを見ながらいつも感じております。北海道支部の皆様の今後のご発展をお祈り致しております。

往時茫茫

（第13期）寺内 榮一

私が管区気象台長在任期は昭和56年4月から昭和58年3月までであり、気象学会北海道支部の支部長の職を穢したのも同時期の2年間であった。今から20年以上も前の「往時茫茫」の昔に属する。したがって記憶も薄れてきているが、思い出すままに往時を振り返ってみたい。

支部長といっても、管区台長が慣例としてその職に就くだけのことで、運営の実務は、菊地勝弘さん、井上力太さん他の北海道大学の関係の方々があたり、事務処理のサポートは管区気象台の調査課が行い、支部長としての私は、その方々の報告を聞くことが主で、特に指

導性を発揮することは無かった。支部長の役割は、いわば「裏方」として管区職員の調査研究を奨励して学会における調査研究の発表を盛んにすること、札幌で地方大会が開かれる際は、会場の選定、設営、運営、そのための応援としての職員の派遣に指導的役割を果たすことがあったと思う。実際に、昭和57年秋季大会が札幌で開催されたときには、調査課の職員たち共々忙しく駆け廻った記憶がある。

その頃の気象庁（地方官署も含む）には技術官庁的色彩が強く残っており、職員の間にも業務に関連した調査研究を競い合う風があったので、発表する論文の数で苦勞することは無かった。台長の業務の合間をみて札幌近傍の通報所を廻って数値予報の講義をしたことがあったが、「当番明け」の方も含めて結構職員が集まって聞いてくれたことが記憶にある。これなども技術官庁的雰囲気十分に残っていた徴しでないだろうか。

当時、支部長として調査研究などの奨励などにあまり苦勞が無かった理由として、他に次ぎのような点が考えられる。

第1は、今野真悦予報課長、山本 晃、大川 隆予報官、調査課長(?)の小倉士郎さん、岩崎俊樹さんなど、有能の士が揃い、調査研究の柱があったこと、第2は、当時はまだ地方官署の職員には、本庁の大型電子計算機を利用できる機会は少なく、せいぜい管内の中・小型計算機の利用に限られており、これが逆に、調査研究に物理的、気象学的な考え方を働かす余地が大きかったことから論文発表がし易かったことである。

例えば総観気象学的解析の手法を用いた論文の発表なども多かったように思う。第3は、調査研究に割く時間的余裕が職員にあったことであろうか。地方官署には、ローカルな気象現象、気象災害がいくらでもあり、調査研究のテーマの選定に困ることは無かったのである。昭和56年8月の台風15号による史上最大の豪雨禍（石狩川氾濫など）などもあった。

「裏方」としての支部長の役割は、一応果たしたつもりであるが、支部中枢としての「表」の仕事、学会本部との連絡、意思疎通などは、すべて菊地先生始め北大の関係の方々に依存したことを思い、改めてお礼申し上げたい。

なお、退官後マレーシア気象庁で「気象業務の近代化」のため職員の教育指導にあたったとき、マレーシア農業大学におられた井上力太先生と、クアラルンプールで再会し、大いに旧交を暖めながら、札幌時代を懐かしんだこと、その後も先生の亡くなられる迄、交流を深めたことを付記します。私が支部長職に在任しなければ、井上先生との出会いは無かったと思うので。

中国気象学会代表団来札の思い出

(第14期) 駒林 誠

1985年の秋10月に中国から気象学会訪日代表団5名が来札して、管区气象台と北大を訪問した。前年に日本気象学会の代表団が訪中したことへの答礼訪問であった。来日直前に天気32巻7号(1985)で日本の代表団の訪中報告を目にした。そのなかに瓜生道也(故人)が「北京では公式訪問のせい役所のせい、儀礼重視で堅苦しかった」と述べていた。その堅苦しい人物の氏名を見て驚いた。これから来日する代表団の団長がその人であり、しかも札幌が最初の訪問地となる。

堅苦しいと天気に掲載しているということは、ふつうは書かないだろうから、よほど堅苦しい人に違いない。さて、どう歓迎すれば訪日の円満な第一歩を踏み出してもらえるだろうか。管区气象台も役所であるから客人が堅苦しい人物であること自体には驚くことはない。北大は世界中から来訪者があり、どういう客人でも快く受容できるだろう。北海道は黒龍江省と姉妹県であって、同省気象研究所副所長が来道して1983年5月24日に管区气象台を訪

問している。今回の訪日代表団の来札から離札まで北海道総務部国際交流課が日本側通訳をしてくれることになっている。心配することはない。管区気象台はいつものとおり自然体で客人を迎えるのがよい。私は内心でこう考えて心配したことは口に出さなかった。

いざ代表団が来札すると、仕事熱心で賑やかな代表団だった。内心の心配は杞憂だった。来訪の様子は、札幌通信1985年10月20日号の「ようこそ中国気象学会訪日代表団」、北海道支部だより1985年32号の「中国気象学会訪日代表団来訪記」、天気33巻9号(1986)の「中国気象学会訪日代表団を迎えて」の3篇の報告にあますことなく詳述されている。

私が思い出す光景は、管区気象台職員が送迎バスの停車位置からずらりと気象台の階段にも斜めに並んで花束を渡して送迎した光景である。野幌の北海道開拓記念館を往復するバスでは、中国代表団の一人一人に日本側が張り付いて親しく会話をした光景も覚えている。翌日の離札直前に、千歳航空測候所の職員がワープロのキーをポンと叩いて「熱烈歓迎中国気象……」と打ち出すのを見て、団長はじめ団員みなが目丸くして驚きの声をあげた。その職員は何回もせがまれて打ち出した。

その後の中国の経済発展はめざましく、北京にも上海にも超高層ビルが林立し、しかもさらに建設中である。日本の景気も中国が日本から大量に買付けることに依存していると新聞、テレビに報じられている。この原稿を書きながら、パソコンの漢字に目を丸くして驚いた素朴な代表団をなつかしく思い出している。

気象学会支部活動のあり方について

(第17期前期) 二宮 光三

私が支部活動に直接的に関った経験は、東北支部の2年間と北海道支部の1年間だけです。この短い期間の経験だけで、学会支部活動を云々するのは適当では無いかもしれませんが、その時の反省に基づく一つ考えとして受け止めて頂ければ幸いです。

20世紀中頃とは異なり、現在では全国的に見て、学会活動の比重は大きく変化し大学・研究機関に移っております。これは、春季・秋季大会、その他研究集会の参加者、あるいは、気象集誌・天気の投稿者の所属から明らかです。もちろん、それ以外の所属の会員も、学会誌などから多くの情報と知見を得てはおりますけれども。

このような変化にかかわらず、未だに学会事務局等の負担が気象庁所属の会員に大きく懸かっているのは、少し不自然だと思はれます。また支部長・支部役員などが、伝統的に管理職の人によって占められているのも(それなりの理由はあるにしても)なんとなく支部活動に“官製活動”の印象を与えております。学会がすべての会員の平等な活動によって維持されるべき時代にふさわしい活動形態を探るべき時だと思えます。

気象台所属や教職の会員も、大学・研究機関所属の会員とは興味の分野は異なるにしても、実に多くの気象学的知見を持っておられます。会員相互の自由で平等な交流を通じて、これらの貴重な知見がさらに系統付けられ、また気象界に向けて遠慮無く発表されるような、自由で開放的な雰囲気盛り上げることが支部活動の一つの大きな実質的な役割であると信じます。

北海道支部の伝統ある活動がこのような方向で今世紀さらに発展されることを願っております。

タイに届いた札幌の雪

(第17期後期) 原田 朗

「細氷」50号刊行を祝します。平成3年、雪と氷に不慣れな一気象学徒として支部会員になり、根雪の上の生活を始めました。札幌に居を移し、最初におどろいたことの一つに、雪解けの4月に芝地が緑色に輝くことでした。冬の空っ風で枯れた関東の芝生は、5月末でもまだ赤茶けています。そこでまず、雪は意外にも、掛布団の働きをしているらしいと気付きます。根雪による保温効果は、曇が雪に変わるところ改めて実感できました。雪の保温効果については、一般の方にも気象専門家にも納得できる説明を用意しておきたいものです。

シーズン最後の降雪日は、記録をたどればわかります。では、いつまで巷に雪が残っていたのか、そこまでは气象台も手伝いしかねます。そのことをある新聞の連載コラムに書いたのを思い出し、取り出してみました。その年の最後の降雪は3月29日で、積雪は4センチとあり、以後日陰では、連休の前日まで土砂の付着した雪が残っていたと記録しておりました。積雪地帯の残雪は邪魔ものですが、こんなたわいもないことを話題にするのも、雪の日のまねな地方に育ったせいでしょう。

俄かに雪と氷に興味をもち始めたとき、雪を利用した冷蔵室の話を目にし、さっそく農業気象の専門家堂腰純先生(当時、気象協会所属)の紹介でその施設の見学に出かけました。そこは札幌市内で多くの馬を飼育しているところで、ひと冬6米の降雪を利用して、生鮮食料品や飼料の冷蔵装置の運用を始めていました。廉価な運転コストで農産物が保存できるこの装置は、除雪した雪を冷熱源とし、冷媒を用い、真夏を通して5度以下の定温貯蔵を目指していました。ソフトな省エネルギー対策ともいえましょう。この施設では馬にスパイク蹄鉄を履かせており、真冬の野外運動が楽しめました。

国によっては雪を見たことのない気象技術者がいます。かつて東南アジアの若い人たちが、研修旅行で札幌の气象台を訪ねてきました。初めて雪を見る人たちとの歓談の席上で、特別な費用をかけることなく、タイに雪の土産を持ち帰る話がまとまりました。しかし雪の専門家でもある气象台の技術者からは無駄な水運びだと失笑を買い、私一人で実験を試みました。運搬容器は簡単で、発砲スチロール箱と台所用の銀紙を調達すればよく、ドライアイスも廉価なものです。出発前日に雪のクール宅急便を宿泊施設まで送り届けておいたところ、後日、大勢のタイの人たちが札幌の雪を囲んでいる写真が届きました。春の除雪作業を思えば、雪は意外に解けにくい氷でもあります。熱伝導や放射の理解は、視覚に頼れないばかりに、応用問題の解決に難しいところがあるのかもしれない。その翌年のこと、気象観測用百葉箱の廃止を検討したとき、教育には棒状温度計の使用が有効だと思ったものです。

オホーツク海で撮影された海氷渦の直径は5.5km

(第18期) 久保田 効

読売新聞社によって1993年2月27日8時に飛行機から撮影された網走の北約70kmの海氷渦の大きさは、幾何投影から直径約5.5kmであった。低気圧性で、隣にも同様の渦が見られる。海氷の大きさは、大きいもので直径30m(図1)。大半は直径約2mから20mの範囲内の板氷(Ck)である。

海氷はこの渦の西側に分布しており、東側には開水面がある。渦付近の密接度は7-8である(図2)。地上気圧図によると、この地域は大きな低気圧場であるが、気圧傾度は比較的弱く、風は弱い(図3)。

新聞掲載後、筆者の要望に応じて、写真資料を提供くださった読売新聞社に感謝する。

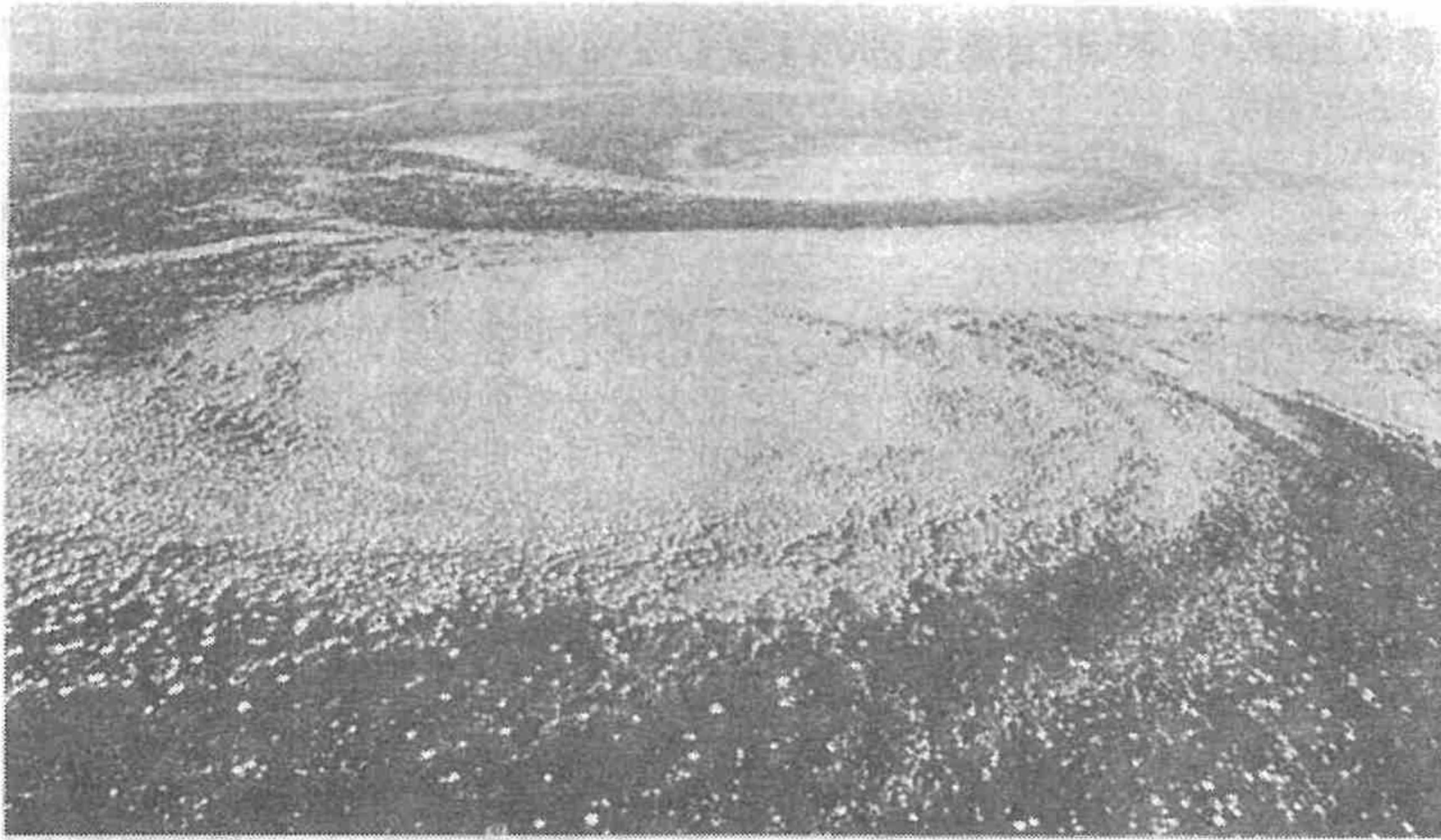


写真 1993年2月27日8時に、読売新聞社によって撮影された海水渦。低気圧性の渦を巻いている。この位置は網走の北約70km。

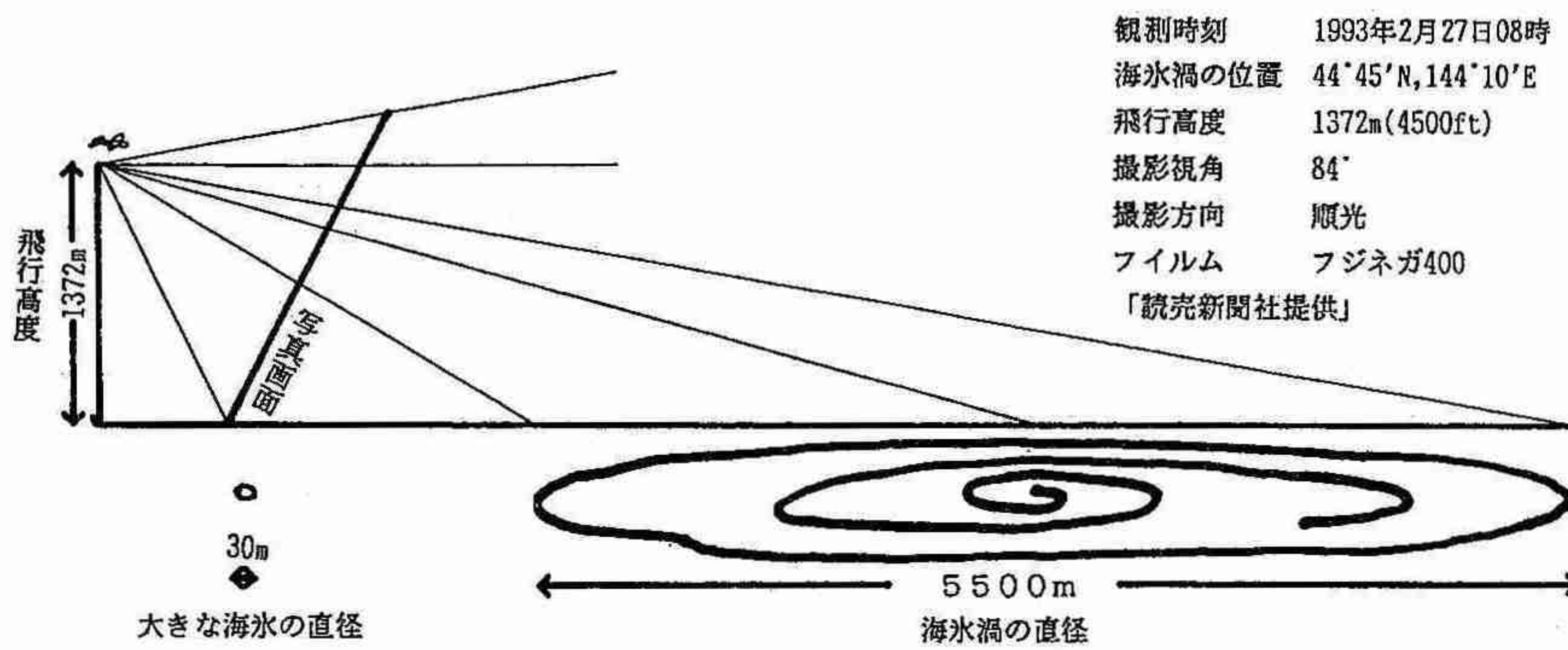
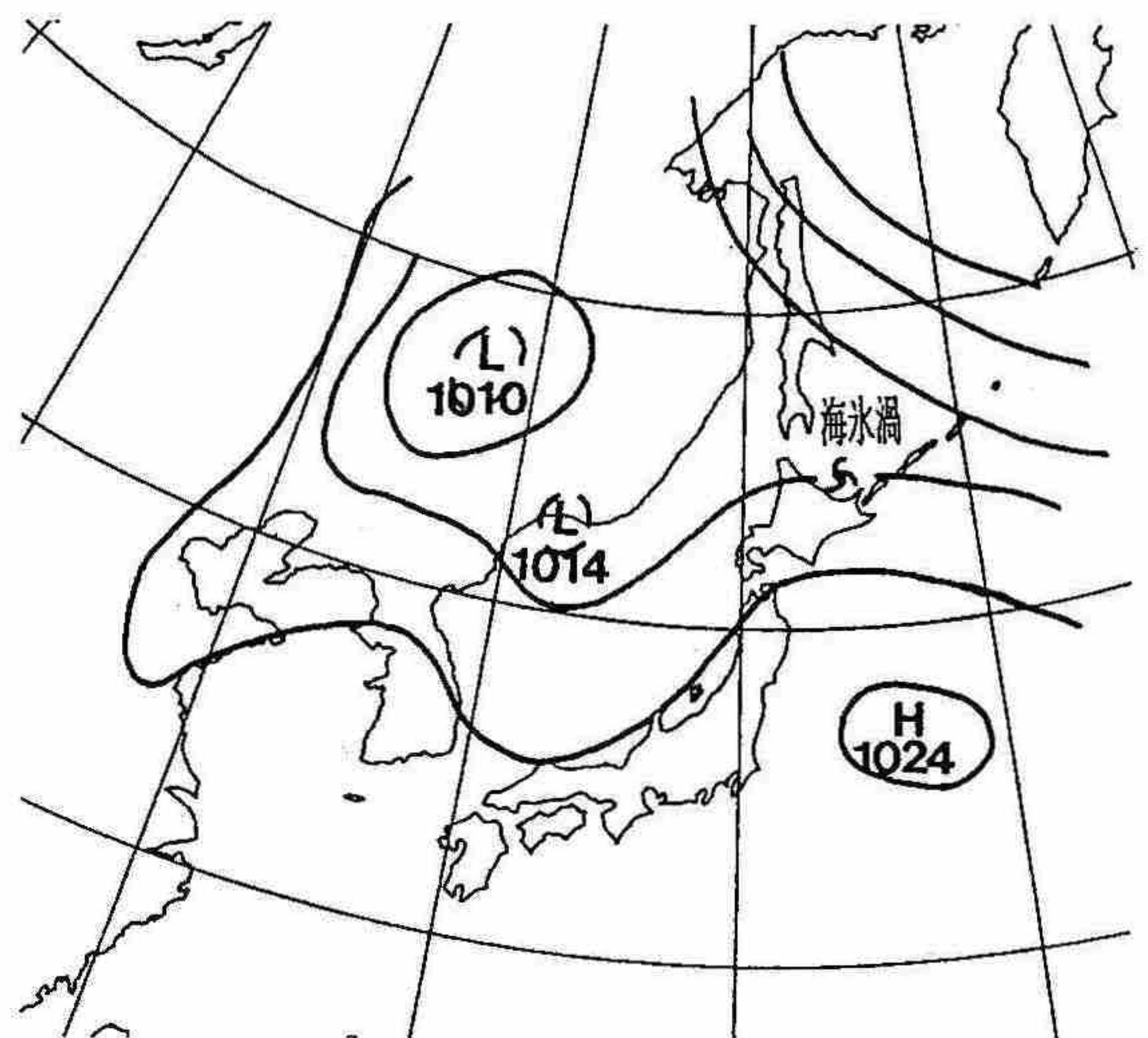
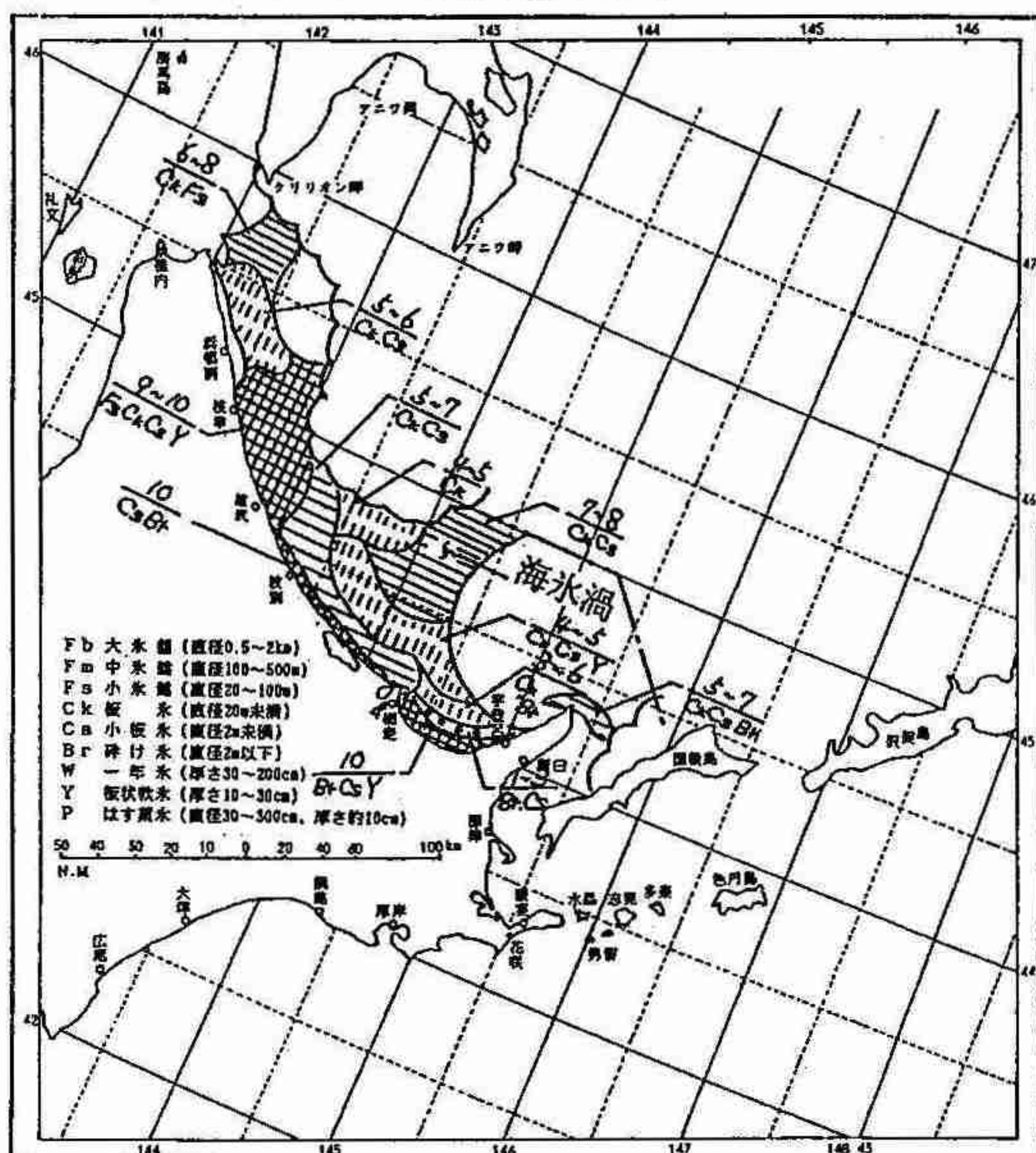


図1. 幾何投影図。飛行機の飛行高度と撮影視角から、大きさが直径約5.5kmであることを推定した。



北海道支部の19, 20期

秋田県立大学教授
(第19期・20期) 菊地 勝弘

私が日本気象学会北海道支部長の任に当たったのは第19、20期の2期4年間、平成6年6月から10年5月までである。所属していた北大理学部地球物理学教室気象学講座担当だった孫野長治先生(第9～11期支部長)が昭和55年3月に定年退官された後の教授となったが、12～18期までは9名の札幌管区気象台長が支部長を務められた。大学関係で言うと、昭和32年7月に北海道支部が設立され、中谷宇吉郎先生が支部長に就任されたが、2期半ばで亡くなられ、その後を元北大低温研所長の吉田順五先生が3期を務められた。支部長は管区台長と気象学講座担当教授の内、年長者が務めることになっていたが、私の前の数期は何故か台長が務められた。

支部長になってからの私の役目は当然、如何に支部活動を活性化させるかであった。「細氷」から、4回の私の支部長挨拶を見ると、例年行っていた「夏季大学」に、気象関連の話題の他に、その時々マッチした地震や天文の話題も取り入れたこと。また、平成7年に文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公開発表(B)」が採択されたのを機に、従来から継続してきた支部気象講演会を釧路での市民大学講座に当てたことです。また北大を訪ねてくれた気象学者による特別講演会を再三開催したことなどです。

支部長になる前は、永く幹事や幹事長、理事を歴任してきましたが、最も思い出に残ることとして、札幌で行われた何十年か前の全国大会の懇親会場に今ではすっかり馴染みになったサッポロビール園を最初に使ったことです。当時は懇親会を如何に盛大に行うかが支部の力量にかかっていたという感があったのです。寄付金集めにサッポロビール園を訪ね、寄付金の代わりに出席者全員に大きな「栓抜き」をお土産として配ったことです。ビール園が各学会の懇親会場になったのはこの時が初めてだったのです。また、機関誌「支部だより」が支部活動の停滞化から29、30合併号としてやっと出版したという経緯がありました。活動のマンネリ化を打破すべく支部創立30周年を機に誌名を変えることとして公募した結果、「北の天気」、「細氷」、「クリスタル」の3案が検討され、現在の「細氷」になったのです。命名者は、後に幹事として大活躍された当時の北大気象学講座助手(現日本気象協会北海道支社)の谷口 恭氏で、表紙のデザインも彼によるもので、その後は皆様のご存知の内容の充実した機関誌になったのです。私は現在仕事の都合で道外におり、「細氷」を見ることが出来ないのを大変残念に思っております。

ますますの支部の発展を心から祈念しております。

北の大地の2年間

(第21期前期) 古川 武彦

北海道支部機関誌「細氷」が創刊50号を迎えられるとのこと、心よりお祝い申し上げます。支部の世話をさせて頂いたのは平成9年から11年春までの2年間でしたが、この期間は、同時に私にとって気象庁勤務40年間の最後の2年間ともなりました。平成9年の春、札幌に赴くと告げられた時の心の高ぶり、実際に海路での赴任時に眼にした、水平線にうっすらとやがてくっきりと姿を現した未だ雪を一杯に頂いていた山々、積丹半島の海岸線、小樽、そして何よりもその時から始まった北の大地の人々とのすばらしい出会いと大自然、それらは私の生涯にとって決して忘れることのできない思い出となりました。

平成9年は、ちょうど北海道支部が秋季大会の当番でした。すでに前任の菊地勝弘支部長をはじめとした関係者が着々と準備をされていたお陰で、学会は盛会裏に終わりました。ただ、10月初旬だというのに夕方から雪が舞ってきたのには驚かされましたが・・・。

札幌管区に勤務する以前からまたその後でも感じていることですが、北大をはじめ、札幌や北海道の秋の自然は学会にはぴったりの雰囲気、今や羊のバーベキューとビールがふんだんの大懇親・交流会は、北海道の定番になっており、札幌ファンは非常に多いのではないかと思います。話が懇親会に行ってしまうましたが、こうした大会成功の裏には、各方面との連絡、予約や調整、会場の設営や当日の運営などに携わられた多くの関係者のご尽力があったからこそと、いまさらながら感謝しております。開催前、時々、管区の調査課に顔を出すと、事務局兼務の田島さんをはじめ、北大の遊馬さん達が頻りに会議を重ねておられたのを思い出します。特に、学会当日は、多数の北大生や気象台職員がそれぞれの持ち場で、黙々として働いておられる姿をみて、感謝の念で一杯でした。

2007年に気象学会は創立125周年を迎えます。学会も社団法人である以上、世の中の動きと無縁では存在は出来ません。ここ10年程度をみても、気象サービスや大学を巡る環境も大きく変貌し、民間気象予報サービスや気象予報士制度なども創設されています。これらの環境変化は、学会本部のみならず、地方支部の存在意義や活動等についても、見直すべき点を顕在化させつつあります。私は、退職後、気象学会常任理事の一員として、主として「教育と普及委員会」を担当し、気象の裾野を広げる使命を負っていますが、現在のところ東京での「夏季大学」の開催に留まっており、新しい方向を模索中です。

どうか、北海道支部が今回の50号刊行を機に、本部や他支部に先駆けて、北の大地から新しい活動の方向を見出され、さらなる発展をされることを期待して筆をおきます。

北海道支部の思い出

(第21期後期～22期前期) 巽 保夫

私は札幌管区気象台に2度、通算4年勤務し、この間に北海道支部の活動に参加しました。

最初は昭和61年からの2年間でした。昭和62年は5年に一度の札幌での秋季大会の年で、前年には支部内に準備委員会が設置されました。私もこのメンバーに加わり、主にシンポジウムを担当しました。秋季大会のシンポジウムは当番支部が主催するので、準備委員会の議論を経て「“どか雪” - 日本海における中小規模じょう乱」がテーマと決まりました。座長は、普通なら1人ですが、北大から遠藤先生と播磨屋先生、気象台から私の3名が指名されました。テーマが気象台の業務にも深く関係するため異例の3名の座長団になりました。シンポジウムの話題提供は、北大の菊地先生と若濱先生、札幌管区気象台の木部予報官、東大海洋研究所の浅井先生、気象研究所の永田さんと猪川さんをお願いしましたが、3名の座長が手分けして話題提供いただく方々にかなり頻りにコンタクトをとりました。これが「注文がうるさい座長団」と映ったようで、シンポジウム直前に関係者が顔を揃えた席で、浅井先生から「我々はまるで猿回しの猿のようですね」との言葉を頂戴することとなりました。シンポジウムは、会場からの発言が相次ぎ、座長団が準備していた討議事項を沢山積み残すほどの盛況ぶりでした。

2度目の札幌勤務は平成11年からの2年間で、この時には支部長を仰せつかりました。今回は秋季大会の合間であり、支部本来の活動が主体でした。支部恒例の行事に夏季大学講座と気象講演会があります。いずれも一般市民への気象の知識等の普及が目的です。

当支部の夏季大学講座は、関東地区、関西地区に次ぐ歴史があります。市の青少年科学館と管区気象台を会場に実施していますが、平成12年は21年振りに噴火した有珠山への緊

急対策で気象台の施設が使えず、急遽北大低温科学研究所に管区気象台の代役をお願いすることになりました。有料ですが受講者は兩年とも40人を超えました。それでも以前と比べ、少し減ったとのことです。

気象講演会は、11年度は北見市で「北見周辺の自然と気候変動」をテーマに開催しました。この講演会では廣田勇先生に特別講演をお願いしました。先生は北見のご出身であり、交通費などは不要であると、文字どおり「手弁当」で快諾いただきました。当地出身で本学会理事長でもある廣田先生を迎え講演会は大好評でした。

12年度の気象講演会は「北海道の農業と気象」をテーマに札幌圏の農業地帯に位置する江別市で開催しました。市郊外の酪農学園大学が立派な施設を無償で使わせてくれるというのが、場所選びの主な理由でした。講演はどれもすばらしく前宣伝もしっかりやりましたが、聴衆はさっぱり集まりませんでした。交通の便や人の集まり易さにもっと配慮が必要であるとの教訓を残す講演会でした。

「細氷」50号達成のお祝いと北海道支部活動の思い出

気象庁 気象研究所長
(第22期後期) 藤谷 徳之助

「細氷」50号達成おめでとうございます。北海道支部は会員の数も少なく、また、広い道内各地に会員が在住しているという困難な状況にもかかわらず、機関誌の発行、年2回の支部研究発表会の開催、気象台・大学・地方自治体等と連携しての夏季大学や気象講演会の開催など、活発な支部活動を長期間継続して来られました。支部機関誌をこのように長期間発行されておられるのは、北海道支部のみであると思います。これはひとえに、支部会員各位の熱意の賜物であり、長年の皆様の活動が「細氷」の50号達成に繋がったものと思います。

21世紀を迎え、「地球環境問題」や「気象予報士」に象徴されますように学会と一般社会との接点がますます多くなってきております。特に、北海道は厳しい冬の気象、農業や観光など、気象に大きく影響を受けることから、気象に対する関心が高く、今後も地域との連携をより深めてゆく必要があります。ともすれば東京一極集中型になってしまうなかで、どのように地域と連携するかは、今後の学会活動の重要な課題であります。活発な活動を続けておられる学会支部の運営に、1年間でしたが携わることができたことは、私にとって大変貴重な経験でした。

札幌勤務はわずか1年でしたが、多くの北海道勤務の経験者と同様に、私も北海道の素晴らしさに魅了され、現在もなお北海道の応援団を自認しております。HPで北海道の映像を見たり、北海道関係、特に鉄道関係の書籍や雑誌が出ると必ず購入して、当時を思い出しております。

それはさておき、支部活動の思い出としては、2001年10月に函館において函館海洋気象台との共同開催で、「北海道の海・空・大地」というテーマで気象講演会を開催したことがあげられます。講演のテーマが、「函館周辺の気象特性と気象災害」、「北太平洋の生物資源変動予測」、「火山との共生」と、函館や北海道に関する話題であることから、150名を超える参加者があり、質問も相次ぎました。講演会場には報道のTVカメラなども入り、当日のTVニュースでも報道されるなど、成功裡に実施することが出来ました。

また、私の在任中は次の年に迫った秋季大会の準備も大きな課題であり、準備委員会を設置して準備に当たりました。私自身は大会には参加できませんでしたが、600名以上の参加があり、大成功であったとの「天気」の記事を読み、安心いたしました。是非、次回の札幌大会には参加したいと思っております。

最後になりますが、支部役員の方々のご支援で無事に支部運営を行うことが出来ましたこと、改めてこの場をお借りして御礼申し上げますとともに、今後も北海道支部が活発に活動を続けられ、支部がますます発展することをお祈りして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

「細氷」創刊50号達成に寄せて

気象庁 気候・海洋気象部長
(第23期前期) 大西 晴夫

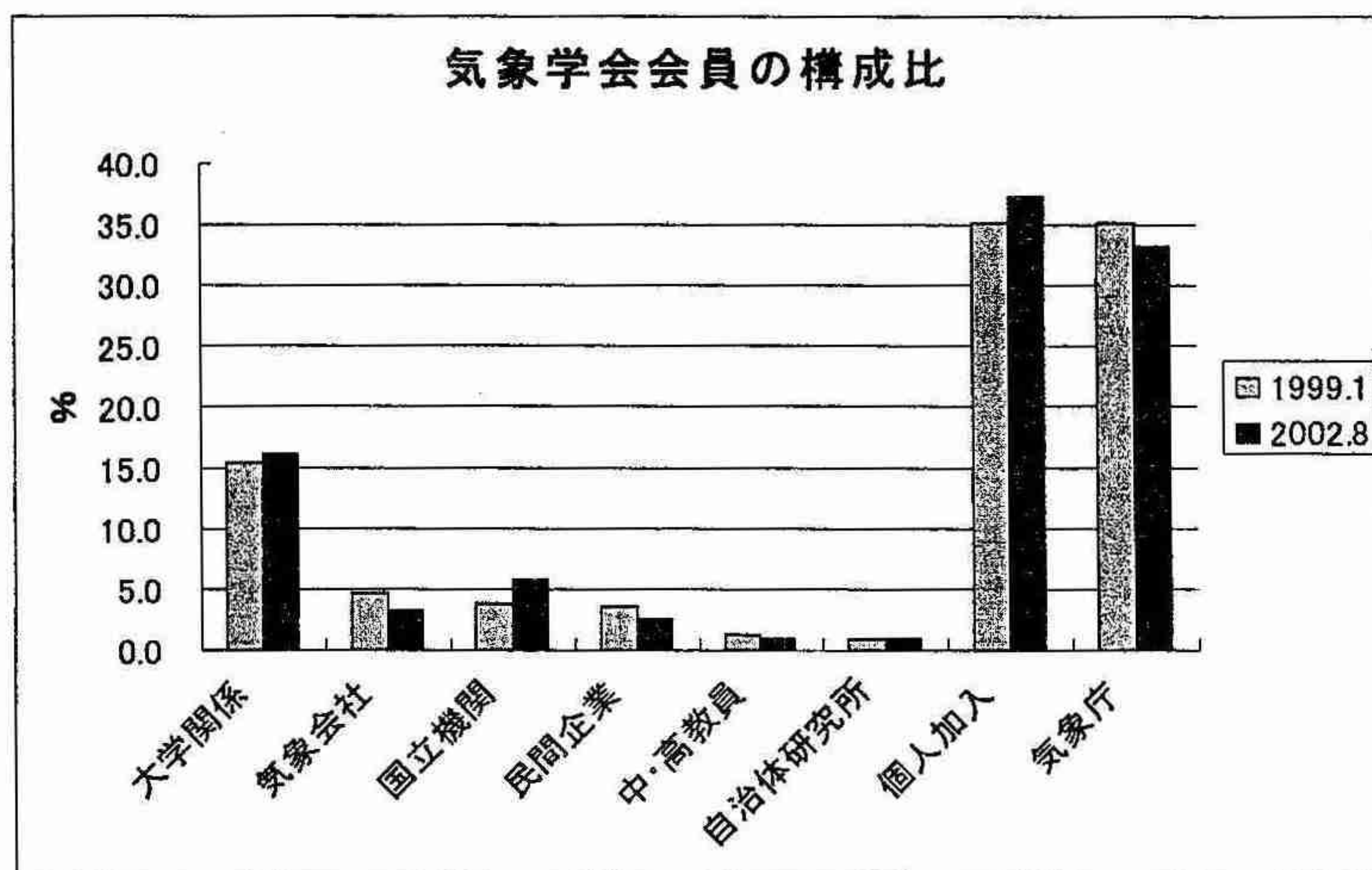
支部機関紙「細氷」が創刊50号を達成されたとのこと。まず、これまで、機関紙の発行に携わってこられた皆様のご苦勞に敬意を表するとともに、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

私が北海道支部の支部長を務めさせていただいたのは、わずかに2002年度の1年間だけのことでしたが、それ以前にも、1996～1997年度の2年間にも支部理事を仰せつかったことがあり、短いながらも3年間の北海道支部とのお付き合いとなりました。ふしぎな巡り合わせで、この2回の任期とも、気象学会の秋季大会が札幌で開催される年にあたり、支部理事会や実行委員会のメンバーが一丸となって大会の準備や運営にあたり、成功裏に大会を開催することができたことは記憶に新しいところです。

北海道では、豊かな自然環境を背景に、農業、畜産業、水産・漁業、醸造業、観光産業など、天候に大きく影響される産業が経済の中心を担っており、それだけに気象や気候に関連する問題への関心の高い土地柄となっています。気象学会の活動が社会的に注目される地域性を備えており、翻って、それだけの活動を道民から期待されているとも言えます。

下図は、1999年1月と2002年8月時点における日本気象学会会員の構成比率を、学会機関紙の「天気」に掲載された会員名簿に基づいて調査した結果です。所属機関ではなく、自宅で登録している会員は「個人加入」としました。気象学会の発足当初は、気象庁職員が学会の大部分を占めていたようですが、近年では3分の1程度に低下し、年々比率が下がる傾向にあります。北海道支部の一番の印象は、北海道大学を中心とする大学関係者、札幌管区気象台を中心とする気象庁関係者、それに民間事業者である気象協会職員の3者が、鼎の三本の足のようによく連携して支部活動を支えていることです。その点から言うと、学会活動では、本来、主翼を担うべき大学の比重が

年々大きくなってきていることは当然のこととして、気象庁関係、特に地方官署での学会加入率の低下や、大会や研究会での気象台関係者の研究発表件数の減少は寂しいことです。2002年8月の会員名簿で調べたところ、気象官署職員全体に占める学会会員の割合が全国平均で22%であるのに対



し、北海道では 11%と全国で一番低く、気象研究所の 70%や気象庁本庁の 31%は別としても、寂しい限りです。ちなみに、沖縄管内では 34%の高い加入率となっています。面積が広大で地方都市には中核となる大学機関も少なく、どうしても活動が札幌中心にならざるを得ない北海道特有の事情があるにしても、もう少し、気象台職員の加入率を上げたいところです。気象学会というと、何か非常に高等なことを研究している人たちの集まりで、泥臭い現場の予報作業とはかけ離れた世界との認識が気象台の職員にはあるようですが、予報現場で日々経験する天気予報の難しさ、大気現象の不思議さが、十分に学会の最先端の研究者の興味を引くことをもう少し宣伝するとともに、現場の予報担当者でも参加しやすい活動の場を学会として提供することも大切なことと思えます。

最後に、北海道支部のますますの発展に期待します。